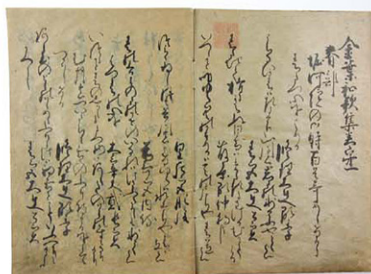


伝山崎宗鑑筆『金葉和歌集』



正宗敦夫文庫は、現在の日本語日本文学科の前身である国文学科発足当初の教授・正宗敦夫(1881～1958)が生涯をかけて蒐集した蔵書のうちの歌書類を中心とした古典籍約100点(400余冊)が、1965年に本学に移管されたものだ。そして、当該文庫の価値を全国的に知らしめるのが、5番目の勅撰和歌集『金葉和歌集』の古写本13点が収蔵されていることだろう。これらは、現在、『金葉集』の学術的理解の上で欠かせない重要な伝本であり、同時に、敦夫の学術性と見識の高さを示すものでもある。

その古写本群の1冊である伝山崎宗鑑筆本は、初度本・二度本・三奏本と改訂を経た『金葉集』のうち、最も流布した二度本の伝本であり、その中でも精撰本系のもものとされる(平澤五郎『金葉和歌集の研究』)。函架番号I-17。室町末写。列帖装。1帖。縦23.1cm×横

15.9cm。楮紙打紙。焦茶色の布表紙で、花菱と雁が斜め格子状に配されている。見返しには、亀甲及び雲霞・浦に帆掛け船・殿舎・樹木などを金で描く。外題「金葉集」(中央に題簽)、内題「金葉和歌集」。116丁(墨付113丁)。1面10行。1首1行書。「山崎住人宗鑑 金葉集(琴山印)」と記す古筆家の極め札が貼付されており、室町・戦国時代の連歌師で『犬筑波集』の撰者と伝えられる山崎宗鑑(1539年以降に75歳以上で没か)の筆ということになる。「青谿書屋」「正宗敦夫文庫」の蔵書印(ともに方形朱印)が押されているため、当該本は、戦前の三井合名会社(三井財閥の持ち株会社)理事であり、蒐集家・大島本源氏物語の旧蔵者としても名高い大島雅太郎(1868～1948)の膨大なコレクションの1冊で、それが正宗敦夫の手に渡ったという経緯を持つことがわかる。

(日本語日本文学科 准教授 木下華子)